

平成30年度

一般入学試験A日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～21ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、次の問い（問1～7）に答えなさい。

家族がそろって自宅でご飯を食べるといのは、戦後間もないころに月に一、二度、家族がそろって洋食屋さんやデパートの食堂（スター食堂なんて名前がよくあった）に行ったのと同じくらい、いまの都市生活ではそれこそ日常茶飯事ではなくなっているのかもしれない。心弾ませ、そしてちよつと気恥ずかしそうに、わたしたちは街なかへ行った。同じ気持ちでいまは家の食卓につく。

物を他人といっしょに食べると、ある種の想像力が育まれる。見えるもの、聞こえるもの、匂いのするもの、そして空気のアカランダンは、そこに居合わせる者が同時にそれを感じる。そして顔を見合わず。こうして同じ感覚に浸る。感覚が勝手に共有されるわけだ。

食べ物には口にくくむ。口のなかで、つまりからだの内部で、じっくり味わう。だから他人のAそれはおぼろげにしかわからない。だから、作ったひとは食べるひとの顔を、ときに心配そうにのぞき込む。想像をはたらかせなくてはならないのだ。他人の思いや感情への想像力は、このようにともに食べるなかで育まれてゆく。この経験を小さい頃に十分にしていないと、わたしたちは他人への文字どおりの意味での「思いやり」を欠くことになるだろう。思いをどのようにして向こうに、つまり見えも感じもできない不在の領域に届けたらいいのかわからないから。

わたしたちの社会では、生きるうえでもっとも基本的な出来事が、じつは見えない仕組みになっている。食料用の動物の屠殺、食材の輸入調達、女性の出産、ひとの死と屍体の処理などのシーンは視野から隠されている。で、調理された肉を、パックされた食材を、胎脂や血液を拭われた新生児を、死化粧をほどこされ正装した遺体をしか、わたしたちは見ない。

どういう作業を経て、肉や食材や新生児や遺体がいま、ここに在るのか。それを思い描くには、想像力が要る。論理的思考も要る。あるいは、「おいしい？」と味を訊くのも、わたしたちがいつも食しているもの、それがどこで作られ、どういうひとの手を経てここにあるのかと考えるのも、ご馳走でおなががいっぱいになったときに、いま飢えに苦しんでいるひとがこの世界には数多く存在するという事に思いをはせるのも、想像のはたらきだ。さらにあるいは、独り暮らしの老人、耳の不自由なひと、不登校の少年は、この世界をいまだんなふうに感受しているか、いま同じこのときに別の国の住民をど

んな不幸が襲っているかを考えることも。

ここで I と II は、感性や知性かといった対立をなすのではない。ともに、B不在のプロセスへの感受性としてある。そういう不在のものへの感受性の根っこが、たぶん味の経験のなかで育まれるのだ。

ここでちよつと野暮つたい議論もつけくわえておこう。

現実には想像力のはたらきによってより現実的なものになる。こじつけで言っているのではない。たとえばこの部屋の向こうにも見えないけれどもいろんなひとがいる。いろんな建物がある。いまとなりにいるひとの気持ちも、想像の力が働きたさないと掴むことができないだろう。見えるもの、聞こえるもの、じかに触れられるものだけでは、世界は成り立っていないのだ。現実を知る、理解するには、想像の力を欠くことができない。

そういう理解をもつとイセイチにする科学は、いま眼の前で起こっている出来事がどんな（見えない）規則や構造によってそういうふうになっているのかを探究する。あるいは宗教。それはこの世界の価値を問う。眼に見え、手に取ることのできるこの場所からではなく、この世界をそっくり外部からとらえなおそうとする。芸術や文学や哲学については言うまでもない。ただ生きるのではなく、生きながら、生きることの意味という、それじたいとしては見えないもののことを考えるのだから。

想像力というと、よく論理的な思考力と対比される。感性VS理性。だがどちらも、いまここにはないもの、不在のものへと向かう心の動きとしてはひとしい。想像力Ⅱファンタジー（空想や夢想）ではない。眼の前にあるものをきっかけとして、眼の前に現われていない出来事や過程を思い描くこと、あるいはそれを論理的に整合的に問いつめてゆくこと、そういう不在のものへの心のたなびきがここでいう想像のはたらきであり、その意味では、科学にも政治にも、あるいは芸術や（他人への）思いやりにも、いきいきとした想像の力がどうしても不可欠なのだ。

いまの社会を見ていると、そういう心のたなびきがだんだん短くなってきているような気がする。世界を、そして他人を理解するとき、想像力というものがどんどん乏しくなってきたような気がする。

学校という場所についても、よく似たことがいえる。

むかし西田幾多郎が京都帝国大学教授を退任するとき、挨拶でこんな言葉を述べた。

「ウカイコ¹すれば、私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した。その後半は黒板を後ろにして立った。黒板に向かつて一回転をなしたといえ、それで私の伝記は尽きるのである。」

幸福な言葉だとおもう。何かひとつのことをやりとげたという想いが、控えめな言葉のなかにはつきり滲んでいる。c)けれどもやはり、幸福な時代だったのだとおもう。学問について、もっと究めなければならぬ、まだ研鑽が足りないという自責の念に苛まれることはあっても、いまのように学問の存在理由、とくにその社会的な意義について、深く思い悩み、打ちのめされるなどということは、この時代、アカデミズムの内部ではほとんどなかったのではないかとおもう。ずっと学校という場所では生きてこなかったひとたちがエキョウダン²に立つということ、このことの怖さは、学校という場所が、ひととして生きていくうえでやむにやまれず絞り出した知恵を伝えてゆくところだとすれば、よくわかる。いまの学校は、他の年齢のひとたち、ほかの仕事をしているひとたち、ほかの感じ方をしているひとたちなど、いわゆる（この社会のなかの）異文化にふれる機会のとても少ない場所だからだ。わかりやすく整理されたことがらばかり習い、じぶんのなかの「闇」と向きあうことが回避されるそんな場所で、きわめて同質的なひとたちだけで「世界」を語るといえるのはとても危ういことだとおもう。外部への想像力がそこに封じこめられるから。

他人を理解するということは、そのひととじぶんが同じ存在ではないということを知るところからはじまる。〈理解〉とは、しばしば誤解されているように、そのひとと同じ気持ちになること、合意を得ることではない。むしろじぶんと相手のあいだにある深い溝に気づくこと、他人のみならずじぶん自身との関係においても言葉の無力に深く傷つくこと、ここから〈理解〉へのたどたどしいけれども確かな歩みをはじめまる。

村上龍の小説『ラブ&ポップ』に出てくる女子高校生の裕美は、よく父親から「何でも話しなさい」と言われる。父親は親子の会話がとてもたいせつだと考えているようで、話しあう機会をつくって彼女のこともっと理解しようとしたがる。そういう父親との関係について、裕美は父親よりも醒めた感覚をもっていて、こう考えている。

「だが、何事も理解し合えるはずだ、と思われるのは困る。理解しようとしてくれるのは、もちろんうれしい。だが、理解し合えるはずだという前提に立つと、少しでも理解できないことがあった時に、事態はうまくいかなくなる。」
たいせつなことは、わからないものをわからないものとして知ることだとおもう。学校でしっかり力をつけておく必要が

あるのは、知らないこと、理解できない事態に直面したときに、それにうまく対処できるような方法ではないのか。そうすると、だじなのは、理解できないものを理解できないものとして知ること、何がすでにわかっていて何が不明であるか、そういう知と不知の境界を知ること、そしてわからないこと、不確定なことに囲まれながら、しかも人生の舵取りをしかとおこなうその知恵だということになる。オケンメイな政治家の思考に、おそらくそれは近づく。政治ほど不在のものへの感受性、つまりは想像力と論理的な思考を必要とするものはない。

さて、もういちど味の話。味覚を「テイスト」という。この言葉で、西洋人が、同時に人間の趣味や道德感覚を、あるいは濃やかなセンスや判断力をあらわしてきたのは、D偶然ではないとおもう。

(鷺田清一『まなざしの記憶』より)

*出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問1 ア～オのカタカナで示した語の傍線部分と同じ漢字を含むものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア カン|ダン

- 1 カンセイな住宅街がつづく
- 2 新入生のカンゲイ会をする
- 3 シヤカン距離をとって運転する
- 4 ダイカンは二十四節季の一つ

イ セイ|チ

- 1 その本は読むカチがある
- 2 イッチ団結して問題を解決する
- 3 チミツな細工の装飾品
- 4 チスイ工事で河川の氾濫を防ぐ

ウ カイ|コ

- 1 外国人労働者をコヨウする
- 2 コモン書を研究する
- 3 バレー部のコモンになる
- 4 イッコ建ての分譲住宅

エ キョウ|ダン

- 1 三階までカイダンを上る
- 2 ビヤクダンの良い香りがする
- 3 私の父はダンカイの世代である
- 4 ダンジョウに上がって賞状を受ける

オ ケン|メイ

- 1 先人のケンブン録を読む
- 2 ごケンサツの通りである
- 3 中央シュウケン国家が成立する
- 4 難語句をインターネットでケンサクする

問2 傍線部A「それ」の指示内容を三十字以内で答えなさい。

問3 空欄I・IIに入るべき語を本文中から選んで答えなさい。(ただし、それぞれ五字以内)

問4 傍線部B「不在のプロセス」として挙げられている具体例を箇条書きで答えなさい。

問5 傍線部C「けれどもやはり、幸福な時代だったのだとおもう」とありますが、筆者が西田幾多郎の時代を幸福な時代と考えるのはなぜですか。その理由を説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 当時は、ひたすら学問の研究に励み研鑽を積むことに意を注ぎ、その存在理由や社会的意義に疑義を感じなかったから。
- 2 当時は、わかりやすく整理された知識を学ぶことが第一義であって、ほかの様々なことを思い悩む必要がなかったから。
- 3 当時は、異文化にふれる機会が極端に少なかったために、じぶんたちの信じるやり方に疑念を抱くことはなかったから。
- 4 当時は、ひとつのことをやりとげることが大事であって、じぶんのなかの「闇」と向き合うことは回避されていたから。

問6 筆者の主張が最も凝縮して述べられている段落の冒頭の五字を抜き出さなさい。

問7 傍線部D「偶然ではないとおもう」とありますが、筆者がそのように考える根拠となる一文をそのまま抜き出さなさい。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

専門学校から大学と、日本国内で高等教育を受けた人は、その人自身に学歴がそなわっている感じだし、学校当局による「証明書」を入手することも容易であろう。学友相互に証明しあえて、卒業証明書などは必要ない。

しかし、学歴ともよべない教育しか受けられなかった人の^A執着、それを証明する資料を見せられるとき、わたしは心をゆさぶられる。義務教育だけであろうと、それを受けられたか否かが、人生を決定したことを知る人たちの心を思い、両親とかさなるものを感じずにはいられない。

わたしなどの場合、「満州国」がなくなつて母校もなくなっている。学校側の記録はなくなった。しかし日本内地であれば、小学校をふくめ、学校に記録がのこっていることもある。明治四十五年（一九一二年）に二十六歳で亡くなった石川啄木の成績や出欠状態は、もとの盛岡の小学校にのこっていた。

成績表を見ると、のちに文名高くなる人が、案外国語の成績が悪いことがある。子供るときから病弱という人の出欠記録をみると、ほとんど「皆勤」だったりする。本人も^A知らない遠い日の姿がこういう形でのこっている。

啄木の短い人生は、その作品、小説、詩、短歌からうかがい知ることができる。しかし啄木が秘めた^B内実、さらに初恋をつらぬいた妻節子を知るべく、啄木の日記と手紙はかけがえのないものだった。

三人目の子を妊^{みこも}る八カ月の身重で啄木の死に会い、一年ほどあとで死んだ石川節子は、夫が「死んだら焼くように」と言いのこした言葉に背いた。「^B私の愛情がそうさせませんでした」と語っているが、そのために貴重な日記その他はのこった。

離れて暮らす日がほとんどだった妻として、読むのが苦痛であるような夫の性的放縦の記された日記その他。しかし、生前に活字になることのない「明治時代」に対する証言といふべき文章を、結核の発熱に苦しむ病床で書きつづけた啄木を知りぬいている妻として、節子はすべてのこした。そこに、啄木と節子の恋愛から結婚生活の全容を知る多くの手がかりもある。

当時、石川啄木がいかなる存在として後世にのこるか、誰も明確には知り得なかったはずである。しかし奇跡のように、

啄木から手紙をもらった人たちはそれを保存した。それは啄木の人生、その業績に近づく重要な資料である。

節子の妹ふき子と結婚した函館の宮崎郁雨は、啄木があいつぐ借金申入れをし、最後の上京(単身)にあたっては母カツ、節子、長女京子の生活を託した人。大きな味噌醸造問屋の長男に生まれ、のちに函館市郊外湯ノ川に「郁雨荘」とよぶ邸宅をかまえてもいる。

郁雨の長男捷郎(夫人は郁雨の姪)のところで、たくさんの写真を見せてもらった。これまで世に知られない節子の晩年の写真さえあった。啄木は郁雨と妻の仲を疑い、節子の「不貞説」を生んでいる。しかしそれは一生貧乏と縁の切れなかつた啄木の、富家の跡とり息子郁雨に対する「ひがみ」であるとわたしは思っている。郁雨は多情多恨の人だが、親友の恋妻と通じるような「蛮勇」とはおよそ無縁である。

写真のなかには、節子の実家、堀合家の家族を撮ったものもあった。そこには父の顔を知らず、生後一年で母を喪つて親の縁の薄い啄木夫妻の次女房江もいた。彼女は十九歳で結核死している。茅ヶ崎南湖院が闘病の場所だった。

わたしは捷郎・郁子夫妻と親しくなり、やがて郁雨の長女森孝がもっていた節子の手紙を公けにする許可をもらった。それは文章を書く者にとってはこの上なく大きい恩沢であった。

明治期の天気や温度は翌日、土地の新聞にのっている。

盛岡の町で節子が啄木を訪ねてゆく日の雪の状態を知ろうとして、盛岡市立図書館に電話でたずねた。そして、「岩手新報」にのっていることを教えられ、わたしが求めている日の気象状況を新聞で確かめ、電話で教えてもらった。東京の国会図書館に、明治以後の全国の新聞はマイクロフィルムで収蔵されている。当時新聞記事で天候を確認できることを知らず、盛岡へ出かけてゆくゆりのなかつたわたしは、市立図書館の司書によって助けられた。さまざまな人の好意が、知りたいと努力をしている人間の援軍となることをこのときも身にしみて知った。

当時のことを知っている人間には、のこらず会うべく努める。節子の弟堀合了輔、啄木の姪イネ、郁雨の末弟顧平(捷郎夫人郁子の父)など。イネは老人ホームにいた。そして、さまざまに、啄木の声色を使いもして語ったが、そのあと、わたしに問い返した。

「節子さんはまだ生きていますか？」

啄木・節子の最後の日々は、節子がつけた家計簿によって、赤裸々に示される。残金五厘（百銭が一円、五厘は一銭の半分）という日もある。東京帝大医学部の施療患者として入院した啄木は、大量の腹水をとる処置を受けたが、結核にたしかな治療法なしの時代である。絶対安静、栄養、新鮮な大気が「療法」だった。

家族感染の発端である母カツが亡くなる。啄木も末期の患者なら、節子もかなりすすんだ結核患者だった。郁雨と妻の仲を疑い、郁雨一家とも函館に移っている堀合一家ともいっさいつきあわないことを妻に誓わせて、啄木は借金する道を自分で封じる。欠勤つづきの職場である「朝日新聞」の有志たちの好意の寄金、在京の友人からの借金も、家計をうるおすには足りないこと、切りつめようもない食生活であることを、節子を書いた日々の家計簿によって知ることができる。

家計簿、手帳。とくに家計簿は女性向きだが、このどちらも大切である。わたしは昭和二十四年（一九四九年）四月に就職、三十八年二月退職までの給料（および賞与）の明細表を全部もっている。なにか目的があったのではなく、自然にこのしてあった。

日記はつけたりつけなかったりだが、日録的なものとして、一九五四年から現在まで「文藝手帳」（文藝春秋発行）を処分しないできた。ほかに各月のスケジュールと出来事を書きこんだ大学ノートもある。金銭出納簿もずつつけている！ こういうものがあとでどんな意味をもつか体験としてよく知っているので、公証役場で作った遺言書に「死後いっさい焼却」の一項目がくわえてある。わたしのもとへ送られてきた手紙もいっさい、焼却されるはずである。わたしは死んだあと、「書かれたくない」人間なのだ。すみません。

^F身勝手ではあるが、表現者の立場としては、資料は細大洩らさず手に入れたいし、証言も聞きたい。

ある人物を書くとき、その人の生年から没年までの社会的事件を一年ごとに書き、年表を作る。この年表は、当時の新聞の縮刷版から書きぬいて、生活臭のある事柄を見落とさないようにする。

関係者の回想、日記、研究書も可能なかぎり読んで、一次資料である本人自身のものとすりあわせる。

集計表という便利な用紙が売られていて、細い罫線がひかれ、さらに十いくつかの項目に分けるたて線をひいたものもある。

長い人生を生きた人は、用紙一枚では足りないが、一年ごとに、何月になにが起きたのか、細大洩らさず書きこんでゆく。根気よくこの作業をしていると、自然にある人物の「人生地図」ができあがってゆく。

書きこむ事項は具体的内容が多いほどいい。

しかし内容が多くなればなるほど、小さな字でこまやかに記入する必要がある。わたしはこの、いささか辛気くさいような仕事が好きであることをかくそうと思わない。これはいわば、第一次の収穫を意味する。

啄木と節子の二人分を一枚の地図にしてゆく過程で、この二人には夫婦二人きりで暮らした日がただの一日もないことがわかった。赤児の長女京子と親子三人、渋民村を離れ、函館に住んだ日が二人の蜜月である。それも母カツを呼びよせての同居により、束の間のもとなる。家族と同居することを非難する気はないが、^エ不遇な結婚生活の二人に、せめて一週間、水入らずで暮らせる日があってもよかったと思う。

釧路の新聞社へ啄木が一人で就職し、芸者遊びと酒に有金と才能の浪費をしつつ、「人形の家」のノラに理解を示す講演をした日、小樽の仮住居で節子は火鉢一つない生活をしていた。これは小樽時代に啄木の留守宅を訪問した友人の証言によって知られる。

(澤地久枝『道づれは好奇心』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～エと意味が類似した言葉を選び、漢字で書きなさい。

ア 1 ヘンクツ

2 フクツ

3 コシツ

4 コウデイ

イ 1 ナイジョウ

2 ナイカイ

3 ヒミツ

4 ヒワ

ウ

1 ジヒ

2 オンケイ

3 オンアイ

4 コウジョウ

エ

1 フウン

2 フコウ

3 コンキユウ

4 キユウジョウ

問2 傍線部A「知らない」の本文における意味は何か。その言葉として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

1 想像できない

2 勘違いしている

3 あり得ないと思っている

4 非常識と思っている

問3

傍線部B「私の愛情がそうさせませんでした」にはどういう思いが込められているか。その思いを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 妻として夫のために何かしたいと思い、これしかないと思った。
- 2 夫の真実の姿を知っているので世間にも知って欲しかった。
- 3 夫が苦しみながらも書いたものを無にしたくなかった。
- 4 夫が書いたものを自分の生きる糧にして生きたかった。

問4

傍線部C「ひがみ」とはどういう意味か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 郁雨の財産がうらやましいと思う羨望が現れている。
- 2 郁雨が裕福な上に不貞まで働いたという憤りが現れている。
- 3 自分だけが不幸という思いから来る心の歪みが現れている。
- 4 自分も郁雨のように裕福になりたいという願望が現れている。

問5 傍線部D「赤裸々に示される」ものは何か。それを説明した言葉として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 生活の困窮ぶり
- 2 病気の重篤さ
- 3 治療の大変さ
- 4 借金の悲惨さ

問6 傍線部Eの「よく知っている」内容とは何か。それを説明した文として適さないものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 金銭的管理の才能を示す貴重な資料となること。
- 2 人の考え方を知る貴重な資料となること。
- 3 人の生きた環境を知る貴重な資料となること。
- 4 人の生活実態を知る貴重な資料となること。

問7 傍線部Fの「身勝手である」とはどういうことか。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から

一つ選びなさい。

- 1 自分のことは変にいじられたくないのに人のことは詮索したいという気持ち。
- 2 体験者と表現者の立場を好きないように使い分けたいという気持ち。
- 3 自分については書かれたくないのに人のことは書きたいという気持ち。
- 4 自分と人との関係は知られたくないのに人の人間関係は知りたいという気持ち。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

江戸時代も後半になるとジャガイモは北海道や東北地方を中心に各地で栽培されるようになっていた。しかし、記録は断片的であり、どこで、どれくらい栽培されるようになっていたのか詳細は明らかではない。それが明治になると、かなりの様子が明らかになってくる。

まず、図5-3をご覧ください。この図は、明治中期における都道府県別のジャガイモ栽培面積のうち、上位一三の道県を示したものである。この図によれば、北海道をはじめとして東北や信州などでジャガイモ栽培面積の大きいことがわかる。とりわけ、北海道は他の地域を圧倒している。また、青森は

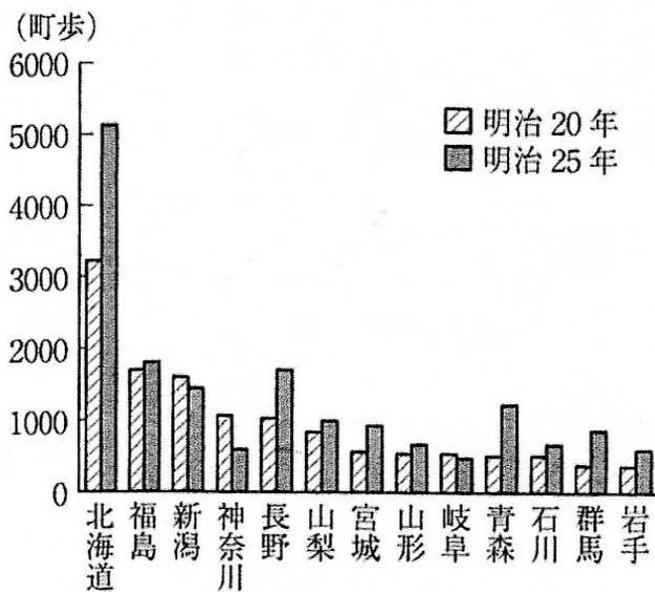


図5-3 都道府県別ジャガイモ栽培面積(上位13の道県のみを示す)。[月川 1990]より作成。

五年のあいだに栽培面積が二倍以上に急増していることが注目される。そこで、ここでは北海道と青森に焦点をあててジャガイモと人びとの関係についてみてみよう。

まず、北海道では明治維新になって開拓がすすめられ、早くも明治四年（一八七一）には開拓次官の黒田清隆が渡米、開拓の指導者としてケプロンを招聘するとともに、ジャガイモの新しい品種をもたらし、これを北海道で栽培させた。ちなみに、黒田清隆は、クラーク博士で名高い札幌農学校の設立や、北海道の警備と開拓のための屯田兵制度などの積極的な政策を展開した人物である。このような甲斐があつてか、明治元年のジャガイモの輸出货量は八万五二九四斤（一斤は六〇〇グラムにあたる）、明治二年に一二万五六〇斤であったものが、明治六年には主として北海道開拓の成果によって九七万四九一〇斤と激増している。

その後も北海道におけるジャガイモ生産は拡大をつづけ、明治二〇

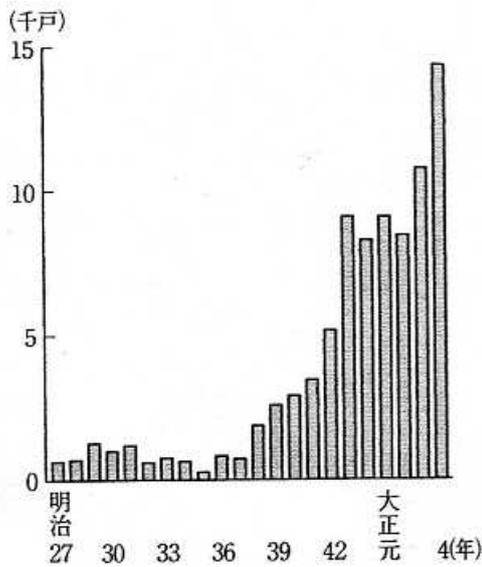


図 5-4 ジャガイモデンプンの製造戸数
〔北海道庁内務部 1917〕より作成

年（一八八七）に三〇〇〇町歩あまりであったジャガイモの栽培面積は五年後の明治二五年には五〇〇〇町歩あまりに達した。また、明治四〇年（一九〇七）には函館郊外に農場をもつ川田龍吉男爵がアメリカから種イモを取り寄せ、そのなかの「アイリッシュ・コブラー」という品種が早熟多収で、しかも北海道の風土にあっていた。そのため、この品種は北海道全土に広がり、後に日本全土にも広がった。この品種こそは、現在も日本で最も広く栽培されている「男爵イモ」である。当時のジャガイモの主な食べ方は塩煮であったようだ。また、ジャガイモを煮てから団子にして食べた、囲炉裏の熱い灰の中で丸焼きにする食べ方もあった。このようにして自家消費しているうちは問題とならなかったが、生産量が増え、商品化するようになるとジャガイモの特徴が大きな問題としてうかびあがってきた。

それは、ジャガイモは水分を多量に含んでいるため重く輸送に不便なことである。さらに腐りやすく、芽が出ることも問題であった。こうして北海道で始まったのがジャガイモデンプンの生産であった。ジャガイモのデンプン生産は、ジャガイモのデンプンの比重が一・五と重くて水の中では沈殿するという簡単な原理を利用したものである。そのため、デンプンをつくることは早くから行なわれており、明治十一年（一八七八）には開拓使によってジャガイモデンプンの生産が試みられていた。ただし、当初のデンプン生産は自家用を目的とした自給的性格のものであり、やがて国内需要の増大とともに換金を目的とする企業の経営が始まった。

デンプン生産が本格的になるきっかけを与えたのが、日清戦争を経て発展した繊維産業であった。紡績用の糊としてデンプンの需要が増加したのである。その結果、明治三〇年以降、道内各地に多くのデンプン工場がつくられた。これに拍車をかけたのが大正三年（一九一四）の第一次世界大戦の勃発であった。当時、オランダ、ドイツからジャガイモのデンプンを輸入していたイギリスやフランスが輸入をとぎされ、かわりに北海道のデンプンが輸出されたのである。その結果、大正元年当時一箱五円のデンプン価格は、同四年には一五円に高騰し、さらに七年に至っては一七円九

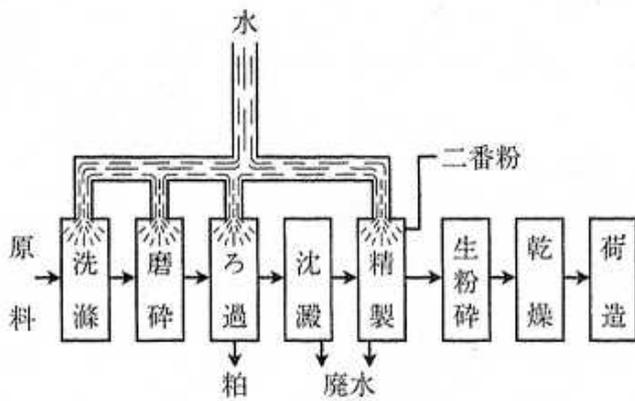


図 5-5 ジャガイモデンプンの製造工程図〔中原 1986〕

○銭と最高値を示し、「デンプンブーム」「デンプン景気」が到来したのである。そのため、デンプンを生産する工場も急増し、大正元年に一万足らずだったものが、大正四年には一万四〇〇〇〇(図 5-4)、最盛期の 大正七年には二万近くになった。これにともないジャガイモの作付面積も大幅に拡大した。

なお、この工場数については注釈を要する。たとえば、大正五年の工場数を動力別にみると、「人力」によるものが一万二九八一、「水車」が二二七一、「馬力」が四九〇、「発動機」が八三、「汽力」が三一、「電力」によるものが七となつていゝる。このうち人力によるものが最も多く一万三〇〇〇近いが、これらは主に自家製造家で、販売を目的とするものは一〇〇戸に満たなかった。したがって圧倒的に自家製造の多かったことがわかる。このことから、実質的に工場といえるものは、一八八二戸(二二・七%)であった、ということになる。

ただし、動力の種類は異なつていても、デンプンの製造方法は基本的におなじであった。図 5-5 にジャガイモのデンプンの製造工程を示したが、この流れは、人力であれ、発動機であれ、変わらない。ここでジャガイモのデンプン製造技術を研究している中原為雄氏の報告によつて、簡単に各工程について説明を加えておこう。「磨砕」は、磨砕ロールでジャガイモを磨りおろすこと。「ろ過」は、デンプン粒と粕とおし分離すること。「沈澱」は、デンプンと不純物を分離すること。「D」「精製」は晒しともいゝが、デンプンを溶解して沈殿させ、良質の一番粉と純度の低い二番粉に分離すること。「生粉砕」とは、精製後に水をぬき塊状になつた生粉(水分を五〇%ほど含む)を乾燥室に入れ、乾燥効果をあげるため小豆程度に砕くこと。「乾燥」工程を経て水分が一八〜二〇%の末粉デンプン(精粉をしていないデンプン)が得られる。これが精粉工場にまわされ精粉されるのである。

さて、一時期北海道を席卷したデンプンブームであったが、このブームは第一次世界大戦の終結とともに終焉した。その結果、デンプン価格は暴落、その価格は半値以下となり、倒産する者もあいついだ。そのため、デンプン工場もほとんど姿を消した。

その後、北海道には第二次デンブームが到来する。第二次世界大戦末期から昭和二四、五年頃のことである。この頃は、食糧不足のためにデンブンを主食代わりにすることが多かつたし、甘味食品が欠乏していたことから製飴原料としてもデンブンの需要が急増したのである。当時、一袋一二〇〇円内外のデンブンが、闇値では三〇〇〇円にもなった。こうして、ジャガイモ生産者のあいだで、^E再びデンブン工場の設備の改良や拡張をともなう増産の傾向が強まった。このデンブン工場の拡張については、知床の斜里でデンブン工場を経営し、二〇〇七年八三歳で亡くなられた平岡栄松さんに当時のことを伺ったことがある。それによれば、デンブンの加工には大量の水が必要となるため、知床の斜里を流れる斜里川沿いにはデンブン工場が林立し、その光景は壮観だったそうだ。

(山本紀夫『ジャガイモのきた道』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部A「北海道のジャガイモ栽培面積が他の地域を圧倒していた」のはなぜか、その理由として最も適するものを、

次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 ジャガイモの新しい品種を栽培し、開拓のための積極的な政策を実施していったから。
- 2 輸出量が明治二年に一二万五六〇斤であったものが、明治六年には九七万四九一〇斤となったから。
- 3 五年の間に栽培面積を二倍以上に急増させようという開拓計画があったから。
- 4 北海道は土地が広いため、ジャガイモを生産するのに適した耕作地がたくさんあったから。

問2 図5-3を見て、明治二〇年から五年間でジャガイモ栽培面積が二倍以上になっている都道府県をすべて書き出しな

さい。また、傍線部B「アイリッシュ・コブラー」が、当時、北海道全土に広がった理由を書きなさい。

① 栽培面積が二倍以上になっている都道府県

② 「アイリッシュ・コブラー」が、当時、北海道全土に広がった理由

問 6

傍線部 E 「再びデンプン工場の設備の改良や拡張をともなう増産の傾向が強まった」とあるが、その理由を箇条書きで二つ書きなさい。

--	--